



地球温暖化で学校生活はどう変わったか

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子



○地球温暖化が学校教育にもたらす影響

地球温暖化の問題は、学校教育にも影響をもたらしています。

昔は、秋の大運動会と称して、運動会の練習は夏休み明けから始まるのが慣例でした。しかし、9月も熱中症で倒れる子どもが続出するようになり、春に移行する学校が増えてきました。

また、昔は遠足などの行事以外、子どもに水筒を持参させることは禁止していました。「衛生上管理が難しい」というのが理由でした。そのころ、子どもたちは学校の水道水を飲んで過ごしていました。しかし、体育の後など、炎天下に蛇口の前に長い列ができるようになり、保護者の要望もあって、今は水筒持参が当たり前になりました。さらに健康管理のため、授業中でも水を飲むことを許容したり、一斉に飲む

時間を設けたりするようになりました。夏の時期には、たとえ晴れていても、校庭での外遊びを禁止する日が増えてきました。主に光化学スモッグによるものですが、強い日差しも原因のひとつです。職員室や昇降口では、常時、外遊び可か否かの掲示をするようになりました。

その上、登下校時、激しい風雨に見舞われることが増えてきました。天気予報の精度が増してきたため、少し待てば風雨が止むと予想される場合は、下校時刻をずらすなどの措置をとるようになりました。

これらはすべて、私の担任時代にはなかったことです。しかし、新米先生が子どものころは、すでにこうだったかもしれませんね。もしかしたら、こうした現象が地球温暖化によるものだと気づかず、以前から普通に起こっていることだと思っている人もいるかもしれません。

○日本の「夏」はいつからいつまで?

今の子どもたちはどうでしょう。私は授業をしていて、驚いたことがあります。

「暖かな地域のくらし」を学習していた時でした。「夏はいつからいつまでか」が話題になったことがありました。わ

子どもと動き回れる。子どもと感覚がぴったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

たしが「6月から8月まで」と言うと、子どもたちに強く反対されました。「5月から9月までだよ。だって暑いもん」「学校へ水筒を持って来ていいようになつていないじゃん」と言うのです。なるほど、理由はよくわかりました。しかし、確信をもって言うその姿には、唖然としてしまいました。今の子どもたちとの認識のずれを知らされた思いです。「一年のうちのカ月、約半分が夏だとは。これでは、『四季』とは名ばかりとなつてしまうな」そう思いました。

近年、地球温暖化がもたらす夏の異常高温、海水温の上昇による台風の大規模化、災害の日常化、世界各地で起こっている山火事などのニュースが繰り返し報道されます。しかし子どもたちにとって、それらはどこか遠くの世界の出来事に映っているようです。

○地球温暖化と経済発展のどちらを取るか

もうひとつ。私が危機感を抱くことがあります。今、子どもたちはコロナにすごく敏感です。うっかりマスクを着けずに教室へ入ろうものなら、教師でさえも強く非難されます。給食も一斉に前を向いて静かに静かに食べています。地球温暖化に対する鈍感さ(?)とは、かなり受け止め方が違っているようです。社会も、コロナ対策と経済

政策のどちらを重視するかを盛んに議論しています。しかし、地球温暖化についてはどうでしょう。

国連がつい最近、やっと「地球温暖化は人間の活動がもたらしている」と結論付けました。私はもう一言付け加え、「人間の『経済』活動」と言っただけです。「コロナか経済か」も今日的には大事なテーマですが、より大きな視点で見たときに大事なのは「温暖化防止か経済優先か」ではないでしょうか。

これもつい最近ですが、地球温暖化を人類滅亡と結び付けて議論しているテレビ番組を見ました。今の経済活動のまま社会が発展するなら、地球の平均気温はますます上昇し、人間によって人間が減ぼされる事態になりかねません。

○地球温暖化を自分ごととして考えるために

さて、そんな今、学校教育に何が一番重要か。新米先生も一緒に考えてみてください。

まず思うのは、どこか他人事のようになっている地球温暖化の問題を、少しでも、切実感、危機感をもって見つめるようになってほしいということです。

方法のひとつとして、報道される具体的な映像をぜひ授業に取り入れまし



よう。そして、そこで使われる言葉に注意を向けます。たとえば、よく「五十年に一度の大災害」と言っているのを耳にします。子どもたちには、そこで「変だよ。五十年に一度って言っているけれど、一年に何回も起きているし、何回も言っているじゃん」と、言葉の欺瞞性を見抜く力をもってほしいです。

新米先生が、「昔なら五十年に一度だった」ということだろうね」などと言葉を補えば、子どもたちの中に地球温暖化が強く印象づくのではないでしょう。

さらには、自分の思いにこだわったりとらわれたりするのはなく、事態を客観的、科学的に見つめる力、謙虚さなどを養うことも大切です。

そのためには、授業だけでなく心温まる学級経営、児童理解などに努めましょう。